

戦前期の日中貿易を通じた長江沿岸地域の生漆産地の形成

謝 陽*

The Lacquer Production Areas Formed by the Japan-China Interregional Trade in Prewar Period

Yang XIE

abstract

This paper deals with the formation of distribution centers and channels of lacquer in the inner land of China in prewar days, based on the analysis of the lacquer merchants' activities.

The export of lacquer from China to Japan accounted for 80% of the total production, and was supported by the development of port areas that were led from the opening of river ports along the Chang Jiang. This paper tries to clarify the role of the merchants, using historical documents and deep interview data.

The lacquer circulation relied on Chang Jiang basin basically and chose transit routes to as near ports as possible from each production region. Other than the influence of the transportation by ship, the location where the Jiangxi merchant purchased lacquer was rule factor. The formers tended to sell lacquer to places where many merchants purchase rather than convenient places to the waterway. Therefore distribution centers where a number of merchants gathered replaced production centers as lacquer brand names. Also, lacquer merchants' skill meant a lot for the formation of brands. Lacquer merchants who could regulate the quality of lacquer well got big trust from Japanese merchants, and the brands of the distribution centers have become well-known.

In other words, it is concluded the formation of lacquer distribution routes and brands were greatly influenced by the transport factors, but were also played the activities of merchants more important role.

Keyword : lacquer, lacquer merchants, Chang Jiang, lacquer brands, distribution centers

I. はじめに

中国産漆は古くから日本に入っていたが、大量に貿易されたのは明治に入ってからである。戦前までは生漆貿易が最も栄えていた。日本の漆商が直接中国の奥地に入り買付を行ったことは、戦後の漆貿易に大きな影響を残したと考える。戦前期の日中の漆貿易はどのルートで展開され、また生漆産地のブランドの形成には漆商がどのように関わったのかを本稿で明らかにしたい。それを明らかにすることによって、戦後の漆貿易に現れた諸問題(謝 2010)と比較対照することができる。

生漆の特殊性の一つとして、人間の関わりが強く反映されることがある。生漆は漆樹から採取される樹液であり、化学塗料が大量に市場に出回る以前は東洋の人々の生活に欠かせない塗料の原料だった。生漆は東洋の特産

キーワード：漆、漆商、長江、漆ブランド、集散地

*平成20年度生 ジェンダー学際研究専攻

物といわれ、日本、中国、韓国をはじめ、ベトナム、カンボジア、ビルマおよびタイなどの東南アジアの諸国で生産されている。天然な樹液であるが、自然環境、土地条件などに大きく依存する一方、採取、運搬、精製など商品として流通する各過程において専門技術が必要である。生漆の生産者によって、質がそれぞれ異なるという。そのため、生漆は環境や人的要素がセンシティブに質に反映するものである。また、漆が固まってできた漆膜は高い強度、耐熱性、耐水性、耐油性、耐酸・耐アルカリ性、絶縁性などの良好な特性も持つことから、戦時中、戦略物資として軍需産業に多く用いられていた。その需要が当時の漆貿易の繁栄を支えていたのである。筆者はその貿易の主体である漆商人がどのように戦前活動していたか、という素朴な疑問を抱くようになった。

主要な先行研究として伊藤（1980）の『日本の漆』が挙げられる。そこには、戦時中日本国内の状況について詳しく書いてあるが、戦前中国での貿易の状況を描いていない。他に貴重な歴史資料として、南満州鉄道株式会社上海事務所（1939）の『漆』、拓務省拓南局（1942）の『漆に関する調査』がある。このように文献に限られるため、本研究は中国国内での文献調査とライフストーリーの聞き取り調査を行った。文献として、中国各地方政府が1980～90年代に編纂した文史資料があり、それらを図書館や調査地で集めた。文史資料には政府の役人が当事者による口述内容を文章化したもの、当事者が執筆したもの、政府機関の役人が調査しまとめたものがある。当事者が口述したり、直接書いたものは一次資料としてみなすことができ、既に漆貿易に携わった本人にアクセスできない筆者にとって貴重である。ライフストーリーの聞き取り調査は2010年1月に湖北省恩施州利川県在住の元漆商を対象に行った。

中国国内では、戦前の日中の漆貿易について、20世紀前半は侵略戦争の時期にあったとして、漆貿易は資源への略奪であり、日本商人の活動も一種の経済侵略行為として捉えられている。その観点は今回集めてきた文史資料にも散見される。特に1943年太平洋戦争の拡大につれて、日本では漆が軍需に集中利用され、民需は完全に抑制されていた。漆の統制の下で漆商は御用商人の色彩が濃かったことも否定できない。しかし本稿は1938年漢口、宜昌が陥落する前の時期を扱い、政治的角度から分析せず、あくまで貿易、地域、商人をめぐる史資料をもとに当時の漆貿易の事実を述べることにする。

Ⅱ. 戦前日中漆貿易の特徴



図1 日本における外国産漆の輸入推移
『日本の漆』のデータより筆者作成

図1から見れば、漆貿易は総じて年度による変化が大きい、全体的に戦前と戦後に時期区分することができる。戦前の傾向は1936年日中戦争勃発直前でピークに達し、2,000トンを超え、戦後より遥かに高かった。1945年からの中断は戦争の進行によって阻まれたのである。1936年までは上がったたり下がったりで小さい起伏が多

いが、全体として右上がりで見られる一方だった。そのうち、中国産漆の輸入はかなりの部分が全体の輸入量の曲線と重なり、100%近くが中国産漆だったといえる。しかし1920年代からは中国産漆輸入量と全体輸入量との差が大きくなり、ベトナムやタイなどからも輸入するようになっていった。中国産漆輸入量のピークは1929年で、全体輸入量のピークとずれていることが分かる。これについて「平利生漆史料」(平利県政協文史資料委員会、1984) に関する記述がある。「清末～1925年は年輸出量が約40万斤¹⁾で、最も盛んな時期であった。1926年後戦乱のため、農民が土地離れとなり、土産物や食糧の生産量が減少していた。国民党平利県建設局の統計によれば、1932年生漆などの特産物は1925年の30%しかなく、1936年生漆の産出量は33万斤だった」。1931年の満州事変を始め、中国国内の軍閥戦争も加えて、漆貿易に影響を及ぼしたことがうかがえる。

1939年の南満州鉄道株式会社上海事務所の調査報告によれば、当時日本人に知られている漆の産地は表1の通りである。この表に出てきた産地名には安康、平利、咸豊など生産地域の名前もあれば、野三関、團保寺、万足など集散地の名前もある。ブランド名には渣子漆と大木油子漆を除けば皆地名で命名されている。浙江の漆と安徽の漆は地名でブランド化されておらず、それぞれ浙漆や徽漆と総称されていたが、湖北省、四川省、陝西省及び貴州省の漆はブランド名と産地名とが併用されている。平利漆の産地には湖北省の竹溪があり、万足漆の産地として重慶が、建始漆には建始で産出したものだけでなく、巴東、鶴峰及び宜昌地区のものが含まれている。異なる地域の漆に対して日本人が異なる認識を示していたと言える。

表1 1930年代中国生漆産地

漆名	産地
浙漆	分水、淳安、建德、遂安、壽昌、潜化、臨安、昌化
徽漆	歙県、績溪、休寧、黟県、潜山、太湖、六安
西漆	渣子漆 湖北省 陡河 鄖陽漆 湖北省 鄖陽 平利漆 陝西省 平利、湖北省 竹溪 大木油子漆 陝西省 安康、平利、石泉、漢中、及び河南辺境
南漆	龔潭漆 四川省 西陽、貴州省 銅仁 万足漆 四川省 重慶、万足 大寧漆 四川省 大寧(巫溪)、興山、房県 毛壩漆 湖北省 宜恩、利川、咸豊、来鳳、恩施、團保寺 建始漆 湖北省 建始、秭歸、長陽、巴東、鶴峰、五峰、板橋、野三関、高店子、官店口

出所：『漆』南満州鉄道株式会社上海事務所1939年

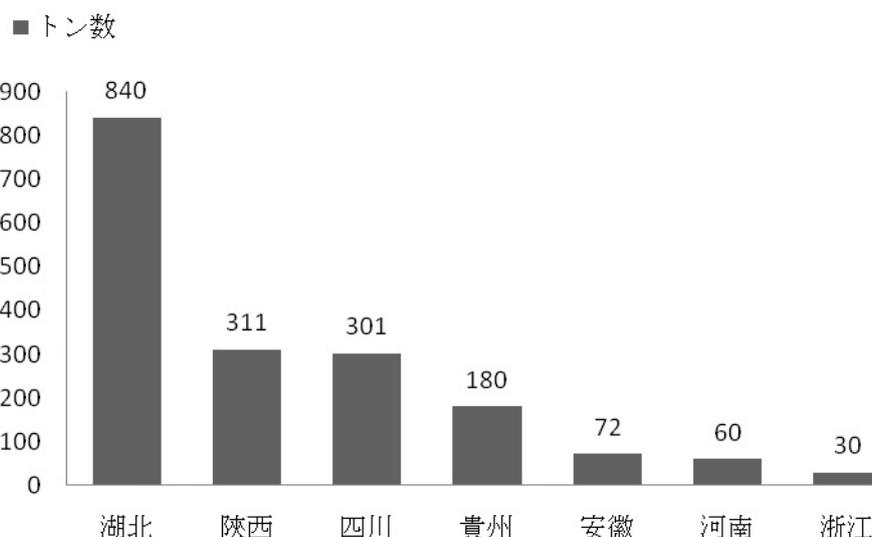


図2 1936年中国産漆省別生産量

拓務省拓南局編『漆に関する調査』1942年のデータより筆者作成

数量的に捉えれば、図2のように湖北省の生産量が抜きんでており、戦後の生産状況²⁾とは大きく異なっている。

以上の特徴を踏まえて、本稿は主要産地の湖北、陝西、四川、貴州とそれぞれの地域間の関係に着目する。その前に、漆貿易の時代背景を考察しておきたい。

III. 港地域と漆産地の発展

生漆の産地は殆ど山間地域であるため、生漆の輸出貿易を発達させるには生産地域の開発と輸出港の交通整備が必須条件となると考えられる。加えて、産地と輸出港をつなぐパイプとなるものも欠かせないのである。

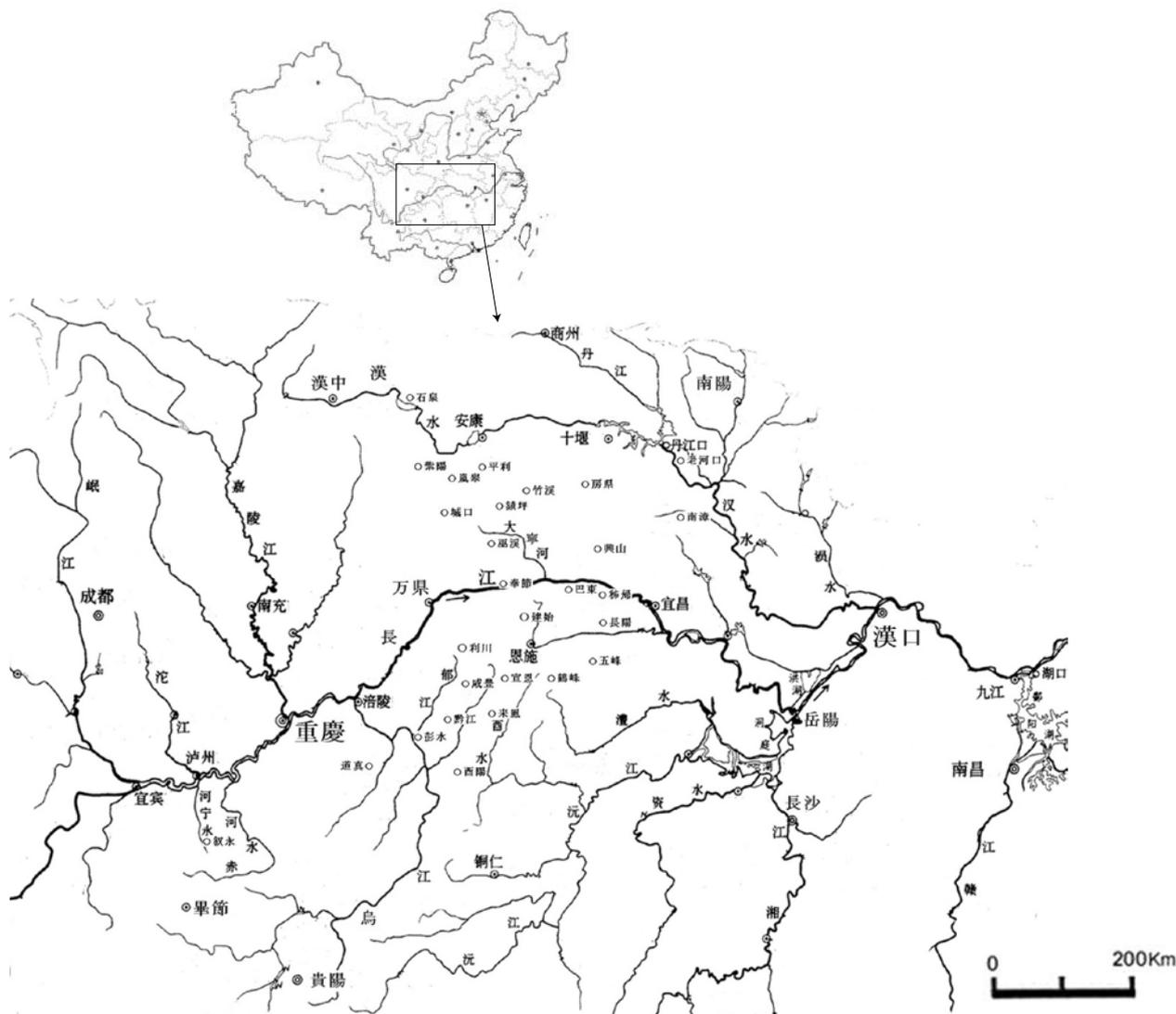


図3 長江中流流域の漆産地

中国水利部長江水利委員会主催の長江水利網
<http://www.cjw.gov.cn/index/information/maps/maps.asp> のデータより筆者作成

III-1. 長江水運と港都市システムの形成

近代中国の経済発展は長江と密接にかかわっていた。開港前、長江流域と海外との間にはわずかに間接的な結びつきがあったただけだった。張ほか（2002）の研究によれば、元来、江西省の贛江を経て大庾嶺を越え広州に運ぶルートと、湖南省の湘江を経て広州へ運ぶルートがあった。広東との境目にある山脈地帯を乗り越え、珠江流域に入るため、この間は人力の運搬に頼るしかなく、大変な労力を必要とした。もう一つの繋がりとして、入江

にある上海を通して日本及び南アジアと一定の貿易関係を保っていた。開港前は長江流域全体で統一した舟運がなく、沿岸都市を中心とする地域内完結構造であった。

1843年上海は通商港として開放され、さらに1840-1899年の間で長江沿いの港都市は次々と開港された。この時期になると、長江上流の特産物はみな長江を下って上海に集散するようになり、上海は広州に代わって新たな対外貿易の中心となったのである。張ほか(2002:30)によれば、物流において長江沿岸都市は上海を中心に、鎮江、蕪湖、九江、漢口、重慶をサブ中心とし、内陸の輸出入はこの五つの仲介都市を通じて上海と連結されたのである。漢口貿易の主要中継港として宜昌、沙市、岳陽、長沙がある。貿易圏は上海から漢口、更に宜昌、沙市、岳陽、長沙などを経て奥地へ拡散するという構造であった。

漢口は上海に次いで各国の商工業が投資する地域であった。19世紀後期、漢口港の対外貿易は各地の特産物の輸出を主としていた。上海の貿易が急速に成長したのとは異なり、内陸地域では自然経済が相変わらず支配的地位にあった。人々の購買力はまだ低かった上に、交通が不便なため、品物はなかなか農村郷鎮まで行き届かないという実情があり、「漢口は開港後、華中ないし中国南西各省の農産物の集散市場としての優勢が現れ、……土産の輸出額が極めて大きいため、1900年前までに漢口の対外貿易は輸出が大きく輸入を上回っていた」(張ほか2002:55, 61)。特に日本にとって、漢口は長江流域に経済勢力を拡大する拠点であった。20世紀に入って漢口における外国洋行、商号の数が増えたが、日系洋行の増加が顕著であった³⁾。『中国商業通史第五巻』(呉慧、2008:160)によれば、1905年に京漢鉄道が開通し、漢口の交通利便性がさらに高まり、漢水を経て河南、陝西まで行き、洞庭湖と湘、資、沅、澧水を経て湖南、広西まで入り、長江を遡れば宜昌、沙市を経て四川に入る。漢口の商業圏では、宜昌、沙市、岳陽、長沙四つの都市は漢口貿易の主要中継港であった。

Ⅲ-2. 山間地域の開発と資本主義経済の刺激

一方、内陸山間地の漆産地では、外来資本の浸透を受けて直接的または間接的な影響を受けていた。『明清長江流域山区資源開発と環境演変』(張健民、2007:385-389)によれば秦嶺、大巴山、巫山、武当山は漆樹資源の重要分布地である。この地域の生漆生産の発展は外来移民との関わりが大きかった。

『明清時期陝西商品経済と市場ネットワーク』(李剛、2006:154-159, 164-165)を参考にすると、漢水のの上流地域は現在陝西省の漢中と安康地区を指している。この地域は秦嶺-大巴山区にあり、北は秦嶺、南は巴山、中を漢水が流れている。山地、丘陵を主要地形とし、漢中盆地、安康盆地が人口密度が高く経済が発達した地区である。清の時期大量の流民がこの地域に入り、人口が激増した。人口の増加は封鎖的な山地に大規模な開発をもたらした。耕地面積が大幅に増加し、食糧生産が増大した。そのため、農民は換金作物の栽培にも従事するようになった。この地域は漆樹の成長に優れ、豊かな漆樹資源を有していたが、清の初頭までは地元の住民はその利用法を知らず、清代の人口流入に伴って湖北などから漆掻き技術も伝播してきた。人々は徐々に漆樹の経済価値に気付き、大規模に漆樹栽培を始め、平利を中心に集約的な生漆産地ができた。清末の『紫陽県志』(同上:188)によれば、「紫陽茶、麻、漆、(木)耳、竹木、葉材、生糸、蜂蜜、漆油、桐油、菜油、黄蜡等件、多由水路下至湖北老河口出売、間或上行漢中、從陸路至省銷售」(紫陽の特産物はほとんど水路で湖北の老河口に下り販売される。または遡って漢中まで上り、そこから陸路で省内各地に販売される)。ここでいう「水路」は漢水である。清代乾隆期以降、陝西南部の殆どの商品は漢水経由で湖北へ運ばれ、長江中下流地域の商品も漢水を遡って安康などや、さらには北西地域にまでも運ばれたのである。

Ⅳ. 漆貿易のルートと漆商

日本商人が中国の漆市場に参入し始めたのは日本人の海外進出に伴った行動であった。奥地に最も早く進出したのは大阪の漆商斎藤作五郎、水田光三郎であり、1907年に漢口に来て「斎藤洋行」と「水田漆行」を設立している。この二社は規模的にも最も大きい漆商で、他には田島洋行、茂木洋行なども生漆の買付をしたが、量的には前の二社に及ばなかった。漢口市場における生漆は大抵日本商人によって購入され、約80%を占めていた。1930年代、漢口には漆行⁴⁾が4軒、漆号が20軒、漆庄が6軒あり、日本洋行は6軒あった。殆どの店舗がもっとも栄えている商業中心地、漢正街及び周辺に集中し、漆業が漢口の商業で重要な地位を持っていることがうかが

える。そのうち、江西省高安県からの漆商が19軒あり、数が最も多かった⁵⁾。漆商には地域別の「幫」⁶⁾があり、上海幫、福建幫、広東幫などと区別されていた。例えば、漆産地の安康には八つの幫があり、生漆の経営において江西幫、安徽幫と陝西幫しか参入できなかった。各幫はそれぞれの販売ルートを持ち、江西幫は漢口、北京など及び日本人向け、安徽幫は上海、寧波、蘇州及び南地方の商売、陝西幫は天津、青島、河南など北地方の商売を主としていた（「我們所了解的永昌漆号」1981）。『利川市誌』によれば、1877年江西省高安県生漆庄邨二川親子が利川にきて邨記漆庄を開いた。利川において最も古い、最も大きい漆庄である。1918年江西の左逸民と同郷300人余りが利川、咸豊などに引越し、生漆商売を営み始め、益生漆庄、左記漆庄などが相次ぎ現れた。江西商人の到来はこの地域に初めて漆貿易を興したといえる。

1911年には斎藤、水田とも更に宜昌で支店を設けた。それによって直接宜昌税関で手続きを済ませ出港できるようになった。戦前宜昌における漆庄は十軒余りあり、買い付けた生漆は毎年約1万担～1.5万担、約30%は国内販売で、他の70%は斎藤、水田に販売した（「宜昌的生漆業」）。斎藤洋行は寿康漆庄（宜昌籍）を代理人（買弁）とし、水田は斎藤よりやや規模が小さく、集成祥の楊金銘（江西籍）を代理とし、それぞれの生漆供給ルートを持っていた。このように日本商人は直接、産地に行き買付をするのではなく、現地の中国人漆商人に買付などの業務を委託し、買付に必要な資金の貸出をしていたのである。「買弁」という言葉を使うが、すなわち外国商人のための代理である。代理となった現地の商人の下にまた更に代理がいるというピラミッド型の組織だった。当時の買付が盛んに行われた場所を図3に示している。

陝西省の産地としては安康、平利が戦前から知られている。安康は長江の最も長い支流である漢水沿いにあり、平利はその漢水の支流壩河沿いにある。両方とも陝西省の南部に位置し、湖北省と四川省に隣接する安康地区に属する。表2では買付商人は殆ど漢口と取引関係を持っていることが分かる。

表2 戦前陝西省安康県の主要漆商⁷⁾

商号	事業主	原籍	年間買付規模	主な取引先
永昌漆号	簡永齡	江西	約35～40万斤	漢口：「謙裕泰」
大昌漆号	何子昌	江西	約10万斤余り	漢口：「田島洋行」
瑞源永漆号	張敦如	山西	約10～20万斤	上海、無錫、北方各省
協成漆庄	鄭雨門	陝西	約20万斤	漢口：「劉協太」、「成永昌」

「建国前安康生漆市場」1981

一方、表3に示されている通り、平利では漆商の規模は安康より小さく、地元の商人が中心となって買付を行い、貿易のシステムにおいて下級の代理人である。生漆は壩河に沿って木造船で閩河口まで運び、そこで大きい船に積み換え、漢水を下って老河口、漢口などに運んでいた。当時平利の大部分の生漆はこのルートを使っていた。または安康の漆商人に納め、安康から漢水を下って老河口を経て漢口、上海、寧波などへ販売されていた。そのうち、漢口の謙裕泰への卸す量が最も多かったという（「平利生漆史料」）。

湖北省の主産地は西南部の恩施州で、毛壩漆と建始漆という二種類のブランドがある。毛壩漆の主産地咸豊と建始漆の主産地建始を例にしてみると、咸豊では江西幫商人の勢力が強く、買い付けた漆を殆ど恩施及び漢口の漆商に納めた。表4のように、咸豊と利川両県は恩施州の西に位置し、四川省の黔江、彭水、酉陽地区とも隣接しているため、咸豊で買い付けた漆にはそれらの地域の漆も入っていたわけである。毛壩は咸豊と利川の境目にある郷鎮であり、「咸豊文史資料」によれば、毛壩は南北に湖南と四川を連結する道路にあるため、貨物の集散地として栄えていた。咸豊の漆はまず毛壩に運ばれ漆商に売り、また人力で万県まで運送され船に積み込まれていた。そのため、毛壩漆は毛壩一か所だけの特産ではなかったという。即ち、四川の黔江、彭水、酉陽の漆と咸豊、利川の漆は毛壩に集められてから長江沿いの港である万県に運ばれ、漢口に着いたのである。一方、建始漆は巴東、秭帰、長陽、五峰、鶴峰などの漆も含めてすべて「建始漆」と称され輸出されていた（『建始歴史人物』）。建始県は恩施州の東部に位置し、商人は長江沿いの巴東または宜昌まで漆を送っていた。

四川の叙永県は四川盆地の南に位置し、雲南省と貴州省との境目にある。長江の支流である永定河が流れている。特に長江沿い港の瀘州に近いため、歴史的には雲南の北東部と貴州の北西部の物資が叙永を通じて長江へ輸送されていた。従って叙永に集まっていた生漆は叙永県産出のものだけでなく、貴州からのものも多かった。「叙

表3 戦前陝西省平利県の主な漆商

商号	事業主	原籍	年間買付規模	主 な 取 引 先
正大明	饒遜安	平利県	10万斤余り	漢口の謙裕泰、安康の簡永齡、上海の南聚興、寧波の周成泰
	康品三	平利県	数万斤	安康の瑞源永
義大利	李次青	平利県	1万斤	四川巫溪
聚義生	劉宗友	平利県	1万斤	安康、老河口
復興久	武言如	平利県	数万斤	老河口、漢口、上海
永裕豊	劉樂山	平利県	1万斤	老河口

「平利生漆史料」1984

表4 戦前恩施州咸豊県の主要漆商

商号	事業主	原籍	買い付け範囲	年間買い付け規模	取 引 先
劉協昌	劉広炳	咸豊	咸豊など	約500桶 ⁸⁾	恩施、宜昌、漢口、南京、上海
恒洋油行	劉漢京	江西	咸豊、利川を主に、四川の黔江、彭水、酉陽地区も	1,000桶以上	恩施の劉福裕、漢口の簡啓祥
	彭仲瑜	江西	利川、咸豊など	約1,500桶	漢口の謙裕泰
	徐樂恒、 陳徳文	江西	咸豊など	500桶以上	恩施の劉福裕

「劉協昌商号」「憶"恒祥油行"」「我在咸豊坐庄收漆的回憶」1991

永生漆今昔談」によれば、生漆の仕入れ地は叙永、貴州などであり、販売量は16,000斤あった。貴州の生漆が長江流域の流通システムに入る際には、もうひとつ重要なルートがあった。それは長江の支流である烏江だった。彭水は四川省と貴州省の境目に位置し、烏江沿いの港であるため、四川東南部商品の主要集散市場であった。万足は彭水で商業が盛んだった郷である。万足は後背に貴州の漆山があり、烏江に臨み、交通に優れ、烏江流域において重要な生漆集散地となった。貴州北東部の生漆は殆ど万足に運ばれてきた。19世紀の中期、江西、湖広（湖南、湖北）などの流民が万足に移ってきて、商業の発展を促した。漆業商号は20軒余りあり、そのうち肖という苗字が最も多く、皆江西省の出身だったという（「古万足の生漆業」）。

商号「肖源順」は1949年まで経営し、60年の歴史を持っていた。その商売の歴史について、「肖芳政は江西人で、咸豊年間叔父とともに万足に移住してきた。若い時、漆号「肖長泰」で修業し、後ほど独立して「肖源順」を開き、彭水、涪陵、宜昌、沙市、武漢、南京、上海まで販売していた。涪陵に中継ステーションを設け、沙市、武漢において支店を設けていた。「肖源順」の取引は彭水の万足と漢口との間で、行きは生漆を主に桐油、五倍子、葉草などの特産物及び食糧、豚剛毛などを輸送し、帰りは綿布、反物を載せていた。生漆の一桶は約75kg、一回の輸送で約1,000桶以上に及ぶ。……綿布の販売は貴州一帯の漆農または近隣地域の住民を対象にしていた。肖源順は貴州農民の生漆を好み、貴州の農民も肖源順の布を好んでいた」（「万足生漆大王」1988）と記述されている。

その記述から見れば、万足は四川の地名であるが、そこで買い付けた生漆は殆ど貴州産のものだとわかる。貴州の漆は烏江を沿って涪陵で長江に入り、漢口まで運ばれていたのである。

さらに筆者は、利川県で「黄慧記」という漆号を開いた江西籍商人の二代目に聞き取りをした。黄氏は80代で1950年代まで漆貿易に携わっていた。

「私の父は沙市の雷長春に弟子入りし漆業を学んだ。その雷長春は親戚であった。修業終了後、師匠は父を陝西に派遣しようとしたが、父が利川を希望したので、結局利川に来るようになった。……漢口で「黄慶昌」の漆号を開き、熟漆を専売していた。その店で働いていたのはみな同郷の親戚だった。……父はとても誠実な人柄で、戦時中日本人が引き揚げたが、注文した漆を父が陸路でマンマーを通して香港まで運び、日本へ発送した。……水田の上西さんは私の父を最も信頼していた。私たちが送った漆なら彼はチェックしない。父がよく話を聞いてくれるとわかっているからだ。……私は子どもの頃江西から出た時父に連れられて漢口の水田漆行に遊びに

行った。日本人が私に車の玩具を買ってくれた。漢口の水田漆行の道路両側の漆樹は私たちが植えたものだった。彼らは毛壩漆を専門的に買い付けていた」。

語りを通して、黄慧記は水田と直接取引していたことや、利川におけるもう一軒の漆商は左氏で、同じく沙市の漆商で弟子入りした同郷者だったことが分かった。店で同郷者を雇用したりしており、江西幫の集団意識があったことが明らかになった。黄慧記と水田とは良い信頼関係にあったことがうかがえる。

V. 終わりに

戦前期の漆貿易の繁盛はいくつかの条件の下で成立したとまとめることができる。長江流域の開港は長江航路の発達を促し、地域的経済連携も一体化されていった。特に上海、漢口、沙市、宜昌、巴東、奉節、万県、重慶、涪陵などの沿岸港は長江水運で繋がり、奥地の漆を輸出するルートの主幹線が作られていった。その中でも、日本商人の進出に伴い、漢口と宜昌は重要な買付拠点となった。一方、奥地の漆資源の開発は商業資本の投資に刺激されたものであった。そこで重要な役割を果たしたのは外来の商人である。開港で資本主義経済が成長した長江沿いの港とは異なり、奥地の漆産地は辺鄙な山間地域であるため、閉鎖的な自然経済が主導だった。その閉鎖的な環境の中で、貨幣が流通する市場がなく、農民は定期市で物々交換をする慣習を保っていた。漆の用途は個人家庭の家具や棺の塗装に限られていた。地元の住民が自ら日本商人と貿易を始めるはずはなかったと考えられる。ここでパイプとなったのは江西幫を中心とする商人である。明末清初の「湖広填四川」は大規模な移民が江西から湖北、湖南へ移り、さらに四川へ移住していた。外来の移民は漆の商業価値に気付き、早くから漆貿易に携わったのである。江西商人たちは中国伝統的地縁関係で結ばれ、漆の買付や貿易を網羅し独占していた。彼らは農民から漆を買付、取引相手に卸して得たお金で反物などの日常用品を仕入れ、また農民に渡す、すなわち産地の現物経済と港地域の貨幣経済をうまく結び付けたのである。後から移住してきた江西人は同郷の漆行に弟子入りし漆の技術を身につけ、その後独立して経営するか専門の漆パイヤーになっていた。彼らの活躍は漆の大量輸出を可能にしたのである。しかし、江西からの移民はもともと農民出身で、多くの資金を持って起業したわけではなかった。彼らが得意とするのは漆を識別する技術と「灌梢」⁹⁾技術だった。資金面では江西の商人は日本の漆商に大きく頼っていた。

日本の漆商は漢口、宜昌で支店を設ければ上海の税関を通さず、直接、漢口と宜昌で通関の手続きを済ませ、日本へ発送できるという流通上のメリットがある。また、産出地に近い立地にいることは人間関係の創出に非常に有利だと考えられる。筆者の聞き取りでは、直接水田洋行と取引していた元江西籍商人は相手から大きな信頼を受けていたことが分かる。日本商人と江西商人との信頼関係は良質な漆の供給の保障と地域ブランドの創出につながった。

ブランドについては、漆商は省別に買い付けたというより、むしろ流域と漆商の活躍場所に規定されたという方が適切である。流通のルートは基本的に水路を依存していた。山間地域から採取した漆を長江に運ぶため、できるだけ港に近い輸送ルートを選んだのである。陝西の漆は殆ど漢水を経て長江航路に入り、貴州の漆は殆ど烏江を経て長江に入る。四川の彭水は長江支流沿いに位置し貴州の漆を多く買い付けたが、近辺の農民は漆を湖北省恩施州の咸豊または利川にも販売していた。それは咸豊県や利川県に漆商が多く集まったからである。同じように毛壩漆というブランドは毛壩地域産出の漆が多いからブランド化されたのではなく、毛壩における漆商の買付が盛んだったため、周辺地域の漆がここに流れ込んできたのである。当時恩施州の江西商人らの活動が恩施地区以外の場所にも及び、買付量の多さに地域のブランドが成り立った。

本稿では四川、上海などの地域の資料が乏しく、十分に説明できなかったところが結構ある。さらに日本の漆商の活動や彼らから見る貿易の実態がどのようなものかには触れ得なかった。その詳細も今後追究していきたいと考える。

注

1) 斤は中国の重量単位で1斤=0.5kgである。

- 2) 『中国農業年鑑』(1981-2007)のデータによれば、湖北省の生産量は三、四位あたりにある。
- 3) 水野幸吉によれば、1905年漢口における日本洋行と商号は85軒に達し、商人の数は593人であった。また1916年には、漢口における外国洋行はイギリス64軒、770人；アメリカ19軒、197人；フランス15軒、100人；ドイツ32軒、254人；日本64軒、2046人だった。『長江沿江都市与中国近代化』2002：91。
- 4) 中国では漆商は漆行、漆庄、漆号の三種類があった。漆行の規模が最も大きく、取引先に代わって生漆を売買した。漆庄はその店の貨物を売買するのみで、また上海、漢口などの漆行、漆号、漆棧などに代わって、生産地に向かって生漆を買い付けたり、漆商との間に協約を立て、生漆の買付を引き受けていた。漆庄が漆商の代理人となり、協約を結んでいる相手以外の人に代わって仕入れしようとするときには、該漆商の同意を得なければならなかった。漆号は取引先に代わって売買せず、小売及び小口の客筋を中心としていた。
- 5) 湖北省貿易志編輯室 1985. 『湖北近代經濟貿易史料選輯』③. 197
- 6) 幫(バン)とは中華人民共和国成立以前の中国における同業者・同郷者などの相互扶助組合、また、これに類似した団体。厳格な規約があり、強い団結力で外部勢力に対抗した。
- 7) 表のなかの専門的に漆を扱う漆号のほか、漆号のために代理売買を行う山貨行も約18軒あった。彼らは漆号、漆農、漆販の掛け橋となり、成約したら仲介手数料をとる、いわゆる兼業商家であった(「建国前安康生漆市場」)。
- 8) 漆桶を指す。戦前、一桶は約50～70kgあり、業者によってそれぞれ異なる。
- 9) 「灌梢」は当て字であり、他には官笮など書いてある資料もある。戦前の中国の漆商は生漆を葉や油を混ぜたもの以外、優劣問わず全部買い付けていた。生漆は識別して分類し、最も良い漆を一部とっておき調整用にした。大木、小木、油子貨を一つの大きな桶に入れ混ぜており。各取引先のニーズに応じて、足りないものを入れたりして質を調整していた。「灌梢」とはこのような質の調整のやり方を指す用語である。

参考文献

日本語

- 伊藤清三 1980. 『日本の漆』 東京文庫.
 謝陽 2010. 伝統漆器産地による戦後の日中地域間関係の構築. 人間文化創成科学論叢12：297-304.
 拓務省拓南局 1942. 『漆に関する調査』 拓務省拓南局.
 南満州鉄道株式会社上海事務所 1939. 『漆』 南満州鉄道株式会社上海事務所.

中国語

- 戴鞍綱・黄葦 1999 『中国地方志經濟資料汇编』 漢語大辞典出版社.
 湖北省貿易志編輯室 1985. 『湖北近代經濟貿易史料選輯』③.
 湖北省宜昌県地方志編纂委員会 1991. 『宜昌県志』 冶金工业出版社.
 胡永铸 2008. 『建始歴史人物』 長江文芸出版社.
 利川市志編纂委員会 1993. 『利川市志』 湖北科技出版社.
 李剛 2006. 『明清時期陝西商品經濟与市场網絡』 陝西人民出版社. 155-239.
 呉慧 2008. 『中国商業通史』 中国財政經濟出版社. 158-159
 宜昌地区水运志編纂委员会編 1994. 『宜昌地区水运志』 人民交通出版社.
 宜昌市商业志編纂委员会編 1990. 『宜昌市商业志』 内部发行.
 張健民 2007. 『明清長江流域山区資源開發与环境演变』 武漢大学出版社.
 張健民 2008. 『10世紀以来長江中遊区域環境、經濟与社会変遷』 武漢大学出版社. 396-449
 張仲礼・熊月之・沈祖焯 2002. 『長江沿江城市与中国近代化』 上海人民出版社.
 周軍・趙德馨 2004. 『長江流域的商業与金融』 湖北教育出版社. 177-199
 『中国農業年鑑』編輯部 1982～2008 『中国農業年鑑』 中国農業出版社

文史資料

- 政協恩施市文史資料委员会 1985. 恩施“吳永興”商号. 恩施文史資料 政協恩施市文史資料委员会
 政協恩施市文史資料委员会 1988. 恩施“福順祥”、“益施”興衰始末記. 恩施文史資料 政協恩施市文史資料委员会
 咸丰县政協文史資料委员会 1991a. 刘协昌商号. 咸丰文史資料 咸丰县政協文史資料委员会
 咸丰县政協文史資料委员会 1991b. 憶“恒祥油行”. 咸丰文史資料 咸丰县政協文史資料委员会
 咸丰县政協文史資料委员会 1991c. 我在咸丰坐庄取漆的回憶. 咸丰文史資料 咸丰县政協文史資料委员会
 平利県政協文史資料委员会 1984. 平利生漆史料. 平利文史資料 平利県政協文史資料委员会
 叙永県政協文史資料委员会 1986. 叙永生漆今昔談. 叙永文史資料选輯 叙永県政協文史資料委员会

謝 戦前期の日中貿易を通じた長江沿岸地域の生漆産地の形成

- 政协彭水文史资料委员会 1988a. 万足生漆大王肖芳政、肖鼎三及其商号“肖源顺”. 彭水文史资料选辑 政协彭水文史资料委员会
- 政协彭水文史资料委员会 1988b. 古万足的生漆业. 彭水文史资料选辑 政协彭水文史资料委员会
- 政协彭水文史资料委员会 1988c. 建国前彭水商业发展情况. 彭水文史资料选辑 政协彭水文史资料委员会
- 政协安康县文史资料研究委员会 1985a. 建国前安康生漆市场. 安康县文史资料选辑 政协安康县文史资料研究委员会
- 政协安康县文史资料研究委员会 1985b. 我们所了解的永昌漆号. 安康县文史资料选辑 政协安康县文史资料研究委员会
- 政协安康县文史资料研究委员会 1985c. 瑞源永漆号三十年代经营生漆情况简介. 安康县文史资料选辑 政协安康县文史资料研究委员会